

ふたりの夜の世界がくりかえされる：
屈折した「生と性」の深淵に 初めて
映像の光が達した。

吉行淳之介 ● 原作
桃井かおり ● 主演

夕暮まで

監督 ● 黒木和雄

製作 ● 三浦波夫

企画 ● 大塚和

前田勝弘

横井潤一

脚本 ● 田辺泰志

浜地一郎

黒木和雄

プロデューサー ● 中田新一

撮影監督 ● 鈴木達夫

撮影 ● 田村正毅

音楽 ● 荒木一郎

製作 ● 株式会社アートセンター

配給 ● 東宝株式会社

写真 ● 立木義浩

東宝

東京音協10月例会 ￥1000
(一般1400円の処)
音協会員に限り

日比谷 スカラ座
☎ (591) 5355

新宿 武蔵野館
新中央口
☎ (354) 5670

◆スタッフ

原作……吉行淳之介
(新潮社版)

製作……三浦 波夫

企画……大塚 和

脚……前田 勝弘

脚……横井 潤一

脚……田辺 泰志

脚……浜地 一郎

脚……黒木 和雄

プロデューサー……中田 新一

撮影監督……鈴木 達夫

撮影……田村 正毅

音楽……荒木 一郎

◆キャスト

江守 杉子……桃井かおり

佐 々 々……伊丹 十三

祐 子……加賀まりこ

み え 子……山口美也子

園 子……馬淵 晴子

若 い 警 官……江藤 潤

岡 田……風間 杜夫

洋食屋の親父……殿山 泰司

// おばさん……戸川 暁子

鳥料理の主人……原田 芳雄

ものがたり

小説家佐々はみえ子の誘いで、若い人たちのパーティに出向いた。若い男女でむんむんする会場で、佐々は場違いな思いをしながら酒を飲んでいく。片隅で踊りにも加わらず、洋酒を飲んでいく美しい二人の女性に、佐々は眼をとめた。みえ子は杉子と祐子を佐々に紹介した。中年男の佐々が杉子に興味を持っているのに気付いた祐子は、佐々に囁いた。「あの子ヴァージンよ。まっ白いウエディングドレスを着て、きれいな結婚式をあげるといのが口癖なの」

「面白い子だね。誘ってみようかな」
「無理じゃないかしら……。でも、杉子、食いしん坊だから……」

こうして佐々と杉子はつき合うようになった。パーティの帰り、佐々は杉子を高級レストランに誘った。杉子の食欲は旺盛だった。

食事のあと、佐々は杉子をラブホテルに連れ込むが、杉子は決して佐々に身をまかせようとはしなかった。

二人のつきあいが一年経っても、杉子は依然処女であった。佐々はこの奇妙な交際をたのしんでいた。杉子と佐々の夜の世界がくりかえされた。知り合っ

て一年半が経過していたが、杉子はいまも処女であった。

佐々は杉子のかすかな変化に、杉子の影の男のいることを察知した。

ある日、ホテルで杉子はあつさり佐々に身をひらいた。杉子はその時処女ではなかった。この数日の間に、影の男が杉子をうばったのだろうか。

佐々は、二人のつきあひもこれから幕を引く時だろうと思った。

いつものホテルのロビーで、佐々と杉子は会い、食後、佐々は杉子を車で送った。さあ、ここで別れよう、と佐々は杉子をうながしたが、杉子は降りようとしなかった。

「降りしたら奥さんに電話するわ。江守杉子が死にました……」

佐々は黙って、ドアのロックをはずした。杉子は動かなかった。

杉子の頬に一筋の涙が光っていた。

かいせつ

杉子は仰向けになって、全身を真直に伸ばしている。両脚が堅く合さって、横腹にはそれぞれ左右の腕が貼りついたようになっていく。強く締め合えた腿の付根の窪みに、オリブオイルを滴らせ、佐々は覆いかぶさってゆく。

杉子にとって、危険な形になる。

強く閉じられた腿には隙間はできないし、また佐々もその腿を開かせようとはしなかった。杉子に真白いウエディングドレスを着せることのできる立場ではないからだ。(原作より)

野間文芸賞を受賞した吉行淳之介の同名小説の映画化である。透徹した柔軟な文体で、男と女の世界を描く原作は、五十三年九月出版以来、純文学作品としては異例の四十万部を越える売れ行きを示し、現在もまだ広く読者を獲得し続けている。

映画化が最も困難と云われている吉行文学に、祭りの準備、原子力戦争、などの黒木和雄監督が、五十四年度の日本映画賞を独り占めにした桃井かおりと共に挑む異色作。

「もう煩げえはつかない」の主役の女子大生役で、魅力ある最高の演技を見せた桃井かおりが、中年男との屈折した愛をどう表現するか、まことに興味深い作品である。

吉行淳之介◆原作 (新潮社版)
桃井かおり◆主演

夕暮まで

監督◆黒木和雄

株式会社アートセンター◆製作/東宝株式会社◆配給

東宝

